

巻頭言

石川看護研究会の発展に寄せて

宮崎 女四子

石川看護研究会が昭和58年に発足して、早くも第4回の定期研究会開催という歩みが持てましたことを、会員の皆様とともに大変嬉しく思っております。今日まで運営の様々の面にかかわられた方がたの御苦勞には、心から感謝致しております。そして、回を重ねるごとに会員のお一人お一人の胸の内にふくらむ看護への情熱を思います時、この4回で育まれたものの意義の大きさを感ずるのであります。

近年の社会的要請にも基づき、看護界の動向の中におきましても、看護研究の必要性や重要性についての関心の高さと認識の深さは申すまでもございませんが、当研究会の発足もこのような看護界の内側からの高まりにより、看護の実務ならびに教育に関する諸問題について研究し、その発展に寄与することを旨としてなされたものであります。

社会状況の変化、それに伴う生活の諸側面の変化・複雑化、絶え間なく続く疾病の解明と生物学的探求による医療技術の進歩等、現代社会の急速な歩みの中で生活する人々とその健康に、私たちはこれまたこの歩みの中で最善を尽くした看護の提供を目指しております。ここで私たちに必要なものは何でありましょうか。良い実践を行う力、それを看護に携わる者全体の力とすべく努力、こうした先人の蓄積を活用すること。こうして時間的に空間的に見通す能力を培うことは、私たちの自信と力強さを高め、人々の心身の健康をさらに保証して行くことにつながるとおもわれます。このことを考えるにつけ、会員のお一人お一人が日ごろ大切になさっている看護実践の貴重さと、その一つ一つを丁寧に見つめることの必要性を思うのであります。その意味からも、幾多の御苦勞の中で発表された方がたに敬意を表し、今後の飛躍の礎となしていけることを期待しております。

このような看護の向上の拠り所として、この石川看護研究会がその機能を果たして行けるよう会員の皆様の御健闘を願っております。